

寛治 潔 喬茂

1690年元禄3年、修験道の大事、1713年正徳3年、当山宗門御條目写等は修験者であったことをあらわし、小県佐久中老不動院とは小県佐久の郡長格を表す(水沢邦嵩氏談)とのことである。

修験者としての免許状その他の許状なるものが神殿に保管(北西の隅にあったため焼け残った)されていた。その中で、宝暦年間の榮運氏のものが一番多く残っており、上野国群馬郡箱田邑(東橋村)錫杖山普門寺で修行したり、渋川・威徳山真光寺(関東五山の一寺)で僧侶職をおこなった記録がある。また大阿闍梨職の許状・衣冠・装束・院号等があり、当時の修験道制度を知ることができる。

前庭の路地木の下に街道に面して四国八十八ヶ所巡礼の記念の石碑が建てられており、寛了妻・奈加此れを建つとなっている。此の時は水杯を交わして旅立ったと、いい伝えられている。遠い、四国まで長い月日をかけて巡礼の旅に出る。

途中病氣等の事故により帰ってこられないかも知れない。何故そんな危険を冒してまで行ったのか。荻原家が養子を迎えていると伝えられているが、それがいつ頃なのか、また誰であったのか不明である。この巡礼がそれを解き明かす鍵を持っているとも思える。なぜかといえば寛了さんの子供である裕教さんに妻なる人が見当たらない。多分早死にし母なる奈加さんがその供養のために四国八十八ヶ所巡礼をしたものと思う。

養子は分家筋の万屋から来たと伝えられている。多分能信ではないかと思う。

徳川時代は、中山道等主要道に面した家で路地木や池を作ることは、普通の家では身分違いということで絶対許されなかった。歴史に精しい人であれば、庭の樹木を見ただけでこの家が格式のあった家であることがわかるという。屋根はかやぶき屋根であったが、制外屋根といい、神社・仏閣・名主等でなければ許可されないつくりであり、部屋には段差がつけられ、座敷には通常の入り口と別に入り口があった。

しかし他人の請け判により、其の負債を背負い、明治末には家屋敷まで失う没落の憂き目に遭遇している。

潔は荻原家中興の祖であると、常にとらのは子供に言って聞かせていた。何故か寛治の名が少ないのは、家運の隆盛時に坊ちゃん育ちで成長したため、あまり役に立たなかったのではないかと思う。

(とらの 潔 なつ かづ子 寛治 けい 喬茂)

荻原寛治

明治29年－岩村田高等科卒業

明治32年－35年 准訓導を命ず

早稲田大学中退とも小語義塾生として島崎藤村に将来を宿望された文学青年であつ

たとされていたが、その書面等の記録は見当たらない。論語、孟子等、表装も立派な教科書が何十冊も揃ってある(千ヶ滝義吉所蔵)のを見ても家運没落して途中で勉学の道を断たなければならなかったことが察せられる。

(寛治の学んだ 小学校高等科の教科書)

国土(株)の堤康次郎氏との関係も、その結びつきに早稲田というつながりが深く、気が通じ合ったともされている。

教育勅語が発布された当時は、漢文なので難しい漢字が並んでいて解読できる人が少なかったが、荻原寛治が、軽井沢町で一番先に読んで聞かせられたといわれている。

現在の西武の原点ともなった軽井沢進出の第一歩は、大正時代、先代堤康次郎氏が一介の書生姿で沓掛駅へ降立ち、沓掛宿の入会地(共有地)であった千ヶ滝地区に目を付けたことに始まった。

その地を売ってくれと持ち掛けられたのは、3万円という予想だにしない大金であった。

明治に入り、中仙道の宿駅の役割も終わり、浅間根越しの寒村となった沓掛(中軽井沢)村民は、収入の道は閉ざされ困窮していた。金は欲しい、しかし、本当に金を払ってくれるのか。連日連夜会合を開き討議した。「詐欺ではないか」。せっかく祖先が残してくれた財産を、詐欺に遭ったなんてことになったら、祖先に対して申し開きができまいと、なかなか決まらなかった。

その当時寛治は村の書記をしていた。「あの青年は信用しても大丈夫だ。約束は必ず守る。」(文芸春秋・神林氏談) **寛治の一言で売渡が決まった。**

現在、国土・西武は日本の代表的企業であるが、この1件を期に**堤氏のレジャー産業の元祖ともなる千ヶ滝遊園地が誕生したのである。**(その後箱根に土地を求めて箱根土地株式会社となる)。

そんな関係で寛治と先代康次郎氏とは親交関係にあり、大将(堤氏)が軽井沢へくるときは常に千ヶ滝事務所で会っていた。

大将が寛治に恩義を感じていたことは確かであり、古宿集落(寛治の出生地)のお宮の修理等には多額の寄付をしている。(大将名での寄付はめったに見られないとのことである。親交の様がうかがえる。)寛治の親族の死には本人名で過大な香典を供えている。

(祖母 すぐ)

(香典帳)

また寛治は、万座から温泉を引湯して千ヶ滝で温泉浴場を造るという無謀とも思える計画を立て本気で取り組んだ。湯量が多く、泉質がよい、万座の湯を軽井沢で活用しようと考えたのだ。

赤松の丸太を割り貫き、湯を引くための本管づくり。動力機械もないあの当時、1本の丸太を割り貫くのでさえ大変な時代に、気の遠くなるような計画に打ち込んだ。

寛治が直接会社の仕事にかかわりを待ったのはこのときぐらいである。凶状持ち、雲助といわれるような気の荒い連中を相手に仕事をこなさなければならない。賃金の遅払いとか、労働問題のトラブルが生じ、その扱いには大変苦労したようである。人を使うのには知識ばかりでは駄目だ、腕力も兼ね備えなければと甥の義吉には柔道を勧め(強くなれ強くなれ)と期待をかけていたという(その故でもあるまいが、義吉は小諸商業時代、血の小使が出るくらい、柔道選手として励んだ。卒業後、日立製作所へ就職し、成績優秀なるも身体を壊し、退職、長い療養生活をおくることとなる)。

寛治は生家が没落したとはいえ、幼少時代は資産家の長男として、坊ちゃん育ちであり、文学青年を自負しており、理想も高く、人に使われる事は好まなかった。

生家再興の願いもあったと思う。塩壺温泉をもう少し深く掘れば、熱いお湯が出るのではないかと削掘を行った。しかし、削掘道具の鍵を落としてしまい、其れを引き上げられず、借金も嵩み、遂に星野氏に身売りせざるをえなくなる。

その後小学校の訓導をするが、長い期間ではなかったようだ。後の村役場の書記をしていた時に、堤氏との出会いがあった。製材業をおこなう(当時湯川の水を利用し、水車を回し、それを動力源として製材した。八幡さんの近く)。製板(せいはん)の伯父さん、製板の伯父さんと生涯よばれていた。

貴公子的存在であり、外見も立派な人格者であったが、金銭的には縁の薄い人生であったと思う。写真がある筈であるが、見当たらないと言う。実に残念なさいである…。一枚だけあった…。

妻、けい(実名けさ)、群馬県松井田宿・細矢家・芸者置屋の一人娘として生まれ、自由気ままな性格であり、浪費家的なお嬢さんで、景気のよいときはそれなりに派手に振舞い、蓄えるとかいう事をしない人であったという。それ枚生活に事欠くことが多かった。塩壺温泉を売ったときも、実際は借金の方に取られたようなもので、残金は少なく大切な金であったはずなのに、関西旅行に行く。寛治のよそ行きの着物は質入れして、何かことが起こったときに、潔が用立ててやれば、其れまでも質入れしてしまったという。

荻原家には代々日本刀が伝えられていたが、喬茂がもっていった(長男系統であるので当然異議はいえない)。残念ながら其れもなくなっている。たぶん質入れしたのではないかとされている。

路地の本を売り、皆で分けようと言い出した。当時の2百円とは高価な金額であったとのこと。家を守っていたとらのが「祖先の残してくれた大事な財産だ、絶対反対である」と阻止したと、本人が言っていた。人の性格は人それぞれ。価値観・人生観の相違があり、他人がとやかく言うべき問題ではないが、けいさんには、けいさんなりにそれでよかったのでは…。

只一回言いたいことは、このような人だっただけに寛治にとっては、荻原案破産前の寛治ならいざ知らず、身を落としての稼ぎもできず、家族に常に経済的満足感を当えておけるわけにはいかなかった。二女宣子の父親感等によれば、我われには想像にも及ばない驚くべき言葉が残っている。『役立たず親父・親とも思えない。』こんな父親観を

子供に植え付けたのは、母親けいの責任といわねばならない。

荻原寛治は社会的にも立派な人であり、荻原家の誇りでもある。

寛治は何か発明品でも作り出そうと、浅間ぶどうの菓子を作るといって、千ヶ滝のおすぐ婆さん(母親で孫・豊次の子供と一緒に生活していた)の勝手に砂糖を使いろいろやっていた姿を見かけた思い出がある。木を切る自動のこぎりであるとか、自転車をもっと楽に走らせる方法をと(当時山仕事は重要な仕事であり重労働であった。又自転車は千ヶ滝のような坂道は大変だった、楽な方法とは全ての人の願いでもあった。)、その研究もどこまで進んでいたかは知る由もないが、ただひとつ、ロート目薬という点滴状で眼に水薬を注入する方法があったが、其れを考案したのが寛治であったとされている。其れの特許を取っておれば、財を成せるものを、お人よしで他人に奪われてしまったと言われている。

豊次に農業をさせていたが、当時水田に花を導入してみたり、養蚕に通気性をと、屋根峰に穴を開けたり、画期的な試みを行っている。(豊次の保温折衷苗代が考案されるまで生きていたら、どんなに喜んだことと思うし、もっと何かが起こったような気さえる。借宿の六三郎爺からは、論語読みの論語しらずとは寛治のようなものを云うんだ(学問ばかりあっても、金儲けのできないものでは、なんにもならない。))

併し、着想はよく旺盛な進取の気性に富んでいた。理想は高くいろいろ思考錯誤をくりかえし何とか成功させようと努めていた。せめて戦後まで長生きができていたら何か良い目にも、巡り会えたであろうと思うと残念でならない。

一人息子であった、喬茂が生まれたときはまだ祖父能均が存命で、その名付けの親でもある(荻原家の孫で一人だけ)。没落の真最中であったが、少年時代後半は製板業が成功し、経済状況の良い時代であり、田舎では見たこともないラダーの自転車を買ってもらい、それを乗り回して仲間に羨ましがられていた。

先生の子という事で(喬ちゃんに下手に手でも出したものなら、寛治先生にこっぴどく怒られた＝土屋実氏談)、常に親の庇護の元にいたから(中軽)沓掛でも親分肌でいられた。度胸は良い男とは思はないが体格は良かった方なので、東京から帰ったとき沓掛のヤクザ(昔から沓掛という所は遊び人の巢食う所であった。勢力が強く、軽井沢地域の若者には恐れられていた)まがいの者がからまってきた。喬茂一発で、披が吹き飛んだ(当待沓掛には富だ、学だ、久だなど、ならず者が大勢幅を利かせていた)。喬茂曰く(いわく)「これが東京パンチだ、よく覚えておけ・・・」

忽ち町中へ広まって、喬ちゃんパンチと有名になり、語り草となっていたという。

私もその話を伝え聞いたとき、やっぱりお江戸仕込は田舎の沓掛あたりとは格が違ったものかと、ある時、喬茂兄にその事を問うてみた。・・・照れくさそうに「だれえ、俺は怖くて夢中でやったら、うまく入っちゃった。それから、俺が親分に祭上げられちゃってな・・・」

小諸商業学校途中から家業の方も落ち込んで、自らの判断もあったようだが途中退学、親の反対を押し切り東京へ飛び出して行く。

寛治は、実子は親の意に添はず勝手な行動をとる、家にも寄り付かない。

自然、甥の義吉、正次が可愛がられ頼りにされた。学期末には必ず家へ来て、通知表

を見せろという、成績でもよければ自分ごとのように喜んだ、筆字は町でも大先生で素晴らしく上手で、その使った筆が永く実家に残っており喬茂がもっていった。正月の書初め（当時は村中へ配った）、我が家の子供達は皆伯父さんに下書きをしてもらい書いたものだった。

潔は寛治のすぐ下の弟、実弟豊次夫婦を養子として荻原の実家を継いだ訳であるが、あまり頭はよい方ではなかったようだ。併し実直で地道の性格で、「今まで何不自由なく育ってきた地主の子が急転小作人となる」、その憂き目に、家運復興へと身を泣かせて黙々と働いた。借金取りでどうにもならない大変なとき日露戦争が起こり、召集され、貫通銃創を受け帰ってきた。養女の〔とらの〕が昼間父さんの顔を見たことが無かったと言われるぐらい、朝早くから夜遅くまで、寝るまもなく働いた。北上州まで運送引いて稼ぎに行く過酷な労働に耐えた、そしてやっと人手に渡っていた家屋敷をとり戻した。

潔は荻原家中興の祖であるとされている。寛治とは3歳違いの弟であったが、性格も全然異なり、下手に教育がなくて尚よかったかもしれない。とことん身を落としてこつこつと家運復興に努められた、会社では鈍牛と渾名されていたらしいが、その忍耐強さ、人柄あったればこそ現在の荻原がある。最愛の妻を亡くし、多くの人生の、苦難と悲運を乗り越えてきた人だけに、他人には、情けが深く困窮している者には、常に救いの手を差し伸べていた人であった。

潔に恩恵を受けた人は町にも大勢いるはずである・・・（朝起きて戸をおけたら、其の戸口にうずくまって、起きるのを待っていた、何がしらの金を得てゆかなければ、家族に食べさせる朝ご飯が無い。・・・木の根を掘ったトツコの置き物を待って。・・・軽井沢へ職を求めて、他所から来た人達、時にはお金の入らない時もある・・・、頼る人として無い・・・、そんな人に金を用立ててやる姿を、何度も見たことがあった。・・・尚実家古宿には、道祖神祭りという子供のお祭りがある。潔は必ず来てこの祭りに五十銭撒いてくれる。五十銭玉の周りはギザギザが付いて、当時の子供はタンクタンクと（戦車）呼んでいた。五十銭とは当時大金であり他にそんな金を撒いてくれる人はなかった。「千ヶ滝のおじゃん、千ヶ滝のおじゃん」と、子供は自分の祖父のように慕い、お参りに来てくれるのを心待ちにしていた。古宿からよそへ出て成功した、という人もおりましたが、故郷の子供にそんな夢と楽しみを与えてくれた人は、潔以外誰もいない。

兄弟思いで、兄には兄として絶対逆らうことにしなかった。兄の落ち度を咎めることもなく、兄を常に立てて、立派な人であったと、母とらのは常に言いとおした。夏は寛治にタバコと土産品の店を行わせ、寛治亡き後も家族にはテニスコート脇でアイスクリーム、サイダー等の販売店を行わせ、生活面の援助を計ってくれていた。

寛治は昭和10年、町会議員となる。古宿集落、潔関係の票を集めて・・・当時万屋の作次郎と荻原寛治ともう一人、兎に角、沓掛の三羽鳥と言われ行政の上でも、酒の上でも、大いに名声を残したと言われている。これが寛治の人生最後の飾りであった・・・「君達困ったら、何時でも僕のところへこい」、此れが酔ったときの寛治さんのセリフであった。君だの僕だの言う言葉に違和感を感じさせなかったのも、貴公子然とした、寛治さんならではのことであった。

昭和10年5月、亡骸を我が家へ運び込んだ、どうして当時はあんなに死人というのは、恐ろしいものであったろうか、…子供心に忘れられない思い出である。義吉は知らせを受けるや、東京から直ちに駆けつけ、遺体にすがり付いて泣いた。東京まで霊の知らせがあったとも言う。…[すぐ]祖母(寛治の母親)は「自分が代われるものなら代わりたい、何故自分より、先に死んだ。」と幾日も泣き明かした。

そのとき、喬茂の居所は不明であった。親不孝この上なし、とは潔の怒りを買ったものであった。

喬茂が亡くなった、ひとつ心残りは叔父潔に対する誤解である。…「俺は叔父に憎まれていた。」…一杯飲んで酔うと其れを口に出した。そのときそれは違うよと、わけを言えばよかった…そのうちに解るだろうと思っていたら、誤解が解けないままで亡くなってしまった。実に残念である。潔には子供がなかった、喬茂は両親が塩壺にいて自分は、古宿の実家に居ることが多く、小学校へは古宿から通った。子供に恵まれなかった潔夫妻には可愛がられ、いつも、二人の真ん中で抱いて寝てもらって育ったという。「お前の息は臭いとか言われてな…とか言いながらも、…その当時の思い出は忘れられないものであったらしい。むしろその当時の思い出に浸っている感じさえあった。そんな叔父潔に、お前なんかこの家へ来る資格がないと、上がり鼻から蹴落とされたという。…自分か慕っていた人から突き放されたようなショックであった、併し潔にしてみれば当然の事、勝手に家を飛び出し、親の心配をよそに勝手気ままな、放浪生活をしており、住所不定、親の死に目にも会えない。そんな親不孝者。厳格な潔には放せる筈がない。…自分が可愛がって大きくなったこともある、可愛さ余って憎さ百倍、一時的な激情はあったとおもう。

家で一番家系を大切にした人であっただけに、荻原にとっては、大事な立場に在る者である。一日も早く心を入れ替え、確りして欲しいという一念に外ならなかった。…「喬茂にしてみれば他人は言えない自分なりの悩み、考えがあり、没落した家への思い、俺も何とかしなければと思い、努力してみたが世の中そんなに甘くなく、うまく行かなかったと」、述懐したことがあった。

何はともあれ若い頃の放浪生活、彼は余りそれを語ろうとはしなかった…、併しその苦難の体験は、後の万座開発という大事業を成し遂げる上で、社会の裏も表も知り尽くし人の心を掴む術を得る糧となったものと思う、決して無駄ではなかった。

人の成し遂げ得ない難事業事に取り組み、万座天皇と称される程の偉業を成し遂げ得た原動力となった事と思う。

(たばこ屋前 潔 きみ 武子 さだ子 喬茂 義吉)

「荻原家の長男の一人息子が、住所不定、親の死に目にも会えない。なんとしても、身を落ちつかせなければ、目を離したら又何処へ行ってしまうか解からない」ということで、会社へでも勤めさせて(監視付のようなもので)別荘まわりをさせる、毎日長い棒をもってまわっていた。家には祖母と豊次の子供が居るだけだった。煙草は煙草屋だから、なんぼでもある。一番高級なホープしか吸わない。夜帰ってくると「俺も親父さん位の字が書

けるようにならなければと、「しょうじ、かほ(かおる)、紙持って来い・・・」。

店屋だ、半紙はいくらでもある。書いては丸め、書いては丸め・・・部屋は紙の山・・・、苦労を重ね地味にこつこつ蓄えてきた潔が知ったら、どうなっていたらろう・・・晩年喬茂兄にその話をすると、「それを言うな」と弱みを掴まれている我われには天皇も誠に素直であった・・・。

☆もうひとつ思い出話を入れておく☆

荻原家の長男であったのでおすぐばあさんにすれば**一番大事な孫**であった。潔からもらったこづかいを、巾着装に大事にしまって、ためていた。それを喬茂にせびられてしまう。・・・思いどおりにならないと「東京へ行ってしまふぞ・・・」、その一言で、祖母さんの有り金をせしめてしまう・・・。

早く身を固めさせることが、第一であると思っていたところ、親戚先のある人が世話をしてくれることとなった。潔は毎晩のように豊次の所へ相談に来た其の帰りは、千ヶ滝迄、潔のお供として、交代で寒い夜道を行かされた。其の当時のことを豊次の子供は誰でも覚えているはずである。

潔は荻原家の歴史に**一番詳しい人**であったが、家系を誰よりも大事にした人であり、昔かたぎの人であった。家柄がどうの、人柄がどうのと、慎重に調べ、いよいよ話が決まった後も、支度金、やれ着物がどうの、結婚の日取り、その他の心配り、其の苦労は並大抵なものではなかった。

《酒に酔ったとき叔父を鈍牛呼ばりした、とんでもない誤りだ、瞑すべし喬茂、冥土で潔に会って心から詫びられん事を》

鈍牛あって荻原家の再興あり、親代わりの世話になったことを忘れては困る。30歳を越えて、当時としては、兩人とも晩婚であった。

今となっては、**寛治と堤康次郎氏の関係**を知る人は殆んどいない。喬茂も知ってか、知らずや、語ろうとしなかった。親子という余りに身近な関係にあった故、或は詳しいことは知らなかったかもしれない。

喬茂の出世を会社関係の人々の中には「トラックやバスの運転手をしていた人が、**国土、西武の重役**にまでなってしまった、どうしてだろう」・・・という人がいた。

喬茂、寛治の生き様を知れば、寛治に男児がいたことなど堤氏が知る由も無かったのも当然であった・・・寛治が堤氏に会ったとき、当初自尊心もあり、この人に使われることも無い、俺のほうが上だ、会社の方は潔にでも任せておいて、俺は相談役あたりやってやろう、ぐらいいに思っていたのではないかと思う。当時の貧乏会社、給料は何時貰えるのか・・・誰が今日あるを予想し得たことでしょうか。

喬茂には非凡の才能があったことは確かだが、・・・永い間千ヶ滝出張所長をしていた遠藤氏の排斥運動の起こったとき、何時の間にか首謀者(長)になっていた。(先輩が大勢おり後から入社したにも拘わらず)労組など絶対作らせない厳しい会社である。大将自ら事情聴取に来軽した・・・きついお目玉・首をも覚悟の場面であった。ところが其の主謀者たる者が寛治の子であった。

「なに・・・、荻原寛治の倅・・・、寛治に、せがれがいたのか・・・。」

人の出会いというものは奇なるものである。「よし、お前は万座を開発せよ・・・」・・・寛治が万座の温泉を軽井沢へ引くといって苦労していた、まさかそんな無謀なこと、と信じられない気持ちでいたが、千川文次氏の「万座五十年史」を読んで、堤氏がこのことを本気で考えていたのには驚いた。・・・堤氏と寛治の発想、正に桁違いのことを目論む、さぞや気心の合ったもの同士・・・寛治がならず者を使って湯を通す為の木骨を削り貫く作業を、実際に目の前に見て育ち、良く其の話をした生き証人とも言うべき、**義吉も既に亡くなった・・・大将と寛治とが**、万座の魅力に引かれ万座に掛けた思い。その子に成し遂げさせた、当然といえば当然のことであつたが・・・。人の縁の不思議な周り合わせさえ感じさせられる。

大将を、お駕籠で白根山頂上まで担ぎあげた、というエピソードは聞いたが、親子二代の万座へのおもい、其れが叶って、**親への孝養ができたのではないか**とも思う。

親の七光りという言葉を嫌ったが、大将に絶対的信頼を得られたのも父親寛治の關係を見落とすことはできない。